ナポレオン・ボナパルト（1769〜1821）

ナポレオンと音楽

小宮正安

英雄への期待

1789年、ヨーロッパ中を震撼させる大事件が勃発する。フランス革命だ。絶対的な王の権力を、その支配下に甘んじてきた市民階級が奪い取った。そこから、市民が中心となった政治や社会が形作られていった。

……となれば万事メデタシのはずだが、現実は簡単にゆかなかった。市民とは元々、都市で生業を立てている商人や手工業者のこと。出自も考え方もバラバラな人々だ。そんな彼らが、王を倒す目的だけで一致団結していたところ、当の敵が倒れてしまったことをきっかけに、結束が崩れてしまう。挙げ句の果てに、同じ市民同士でありながら自分とは意見の合わない相手をギロチンにかける等して抹殺する動きも出始め、革命は一時暗礁に乗り上げた。

そうした中で登場してきたのがナポレオン・ボナパルト（1769〜1821）。辺境の地に生まれながら、自らの知恵と力を頼りに出世を果たした彼は、名もなき地位から社会の中心にのし上がろうとした市民階級にとって、希望の星だった。しかもナポレオンはフランス国内の不満を押さえるために、軍人としての才覚を発揮し、オーストリアをはじめ古くからの君主制が保たれていた国々との戦争に国民の意識を向けさせることで革命後の混乱を収拾し、自らフランスの指導者の地位へ駆け上っていった。

このようなナポレオンの姿は、フランス以外の市民階級にとっても英雄と映ったにちがいない。横暴な王侯貴族がのさばる社会を変えたい、……そんな思いを抱く彼らにとって、フランス革命を救ったかのように見えるナポレオンは文字通りの「英雄」であって、彼を通じてヨーロッパ全土に「自由・平等・友愛」を謳うフランス革命の理念が広まることへの期待が高まった。

ナポレオンへの期待と失望

こうした期待を背に生まれた超有名曲といえば、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770〜1827）の交響曲第3番だろう。従来の交響曲の概念とスケールをはるかに凌ぐ革命的内容を備えたこの作品は、当初ナポレオンに捧げることを念頭に書かれ、「ボナパルト」という題名も考えられていた。しかし、ナポレオンが皇帝の座に就いたことを知ったベートーヴェンは激怒。作品の表紙に書かれていたナポレオンへの献辞とタイトルを、力任せに削り取ってしまった。

しかもこの後、ベートーヴェンの住んでいたオーストリアの帝都ウィーンそのものが二度にわたってナポレオン率いるフランス軍に占拠されたり、戦禍に巻き込まれたりする。そうした中で、ベートーヴェン自身ますますナポレオンに対する失望を強め、反ナポレオンを標榜する作品を書くようになっていった（ベートーヴェンはフランス革命の理念そのものには共感しており、だからこそ、その体現者であると期待していたナポレオンに裏切られた、という思いが強かったのだろう）。

タイトルを書き直した交響曲第3番の自筆譜

その一つが〈ウェリントンの勝利〉。これは1813年、全盛期の勢いを失いつつあったナポレオンが、ウェリントン公爵アーサー・ウェルズリー（1769〜1852）率いるイギリス軍に敗北を喫したことを祝って作られたものだ。曲中ではオーケストラにより両軍の戦闘やイギリス軍の勝利が描写され、その派手な内容もさることながら、ナポレオンへの勝利を描いた作品として、ベートーヴェンの生前には根強い人気を誇った。

「反ナポレオン」の作品群

似たような例でいえば、ピョート

ナポレオンのモスクワからの退却

ル・イリイチ・チャイコフスキー（1840〜93）の大序曲（荘厳序曲と呼ばれることもある）〈1812年〉も見逃せない。こちらは、ベートーヴェンのようにナポレオンのいた時代に作られたリアルタイムの作品ではなく、1880年に着手され、1882年に初演された。

ちなみに題名にもなっている「1812年」は、破竹の勢いでヨーロッパ中に勢力を伸ばしてきたナポレオンに大きなミソがついた年だ。彼はロシア帝国への遠征を行うも、この地の冬の予想外の厳しさに多くの兵力を失って退散。フランスへ逃げ帰る途中、それまで自らが攻め立ててきた他の君主国から続々と反撃を浴びるようになったからだ（ウェルズリーを相手に敗退した戦争も、その一つだった）。

逆にロシアにとってみれば、侵略者ナポレオンから祖国を守った戦争という意味合いで、この戦いは「祖国戦争」と呼ばれている。というわけでロシア人であったチャイコフスキーにとれば、大序曲〈1812年〉は「祖国戦争」の視点から書かれた作品であり、ナポレオンの脅威を前にしたロシアの人々の祈り、猛（たけ）り狂うフランス軍へのロシア軍の勝利といったプログラムが、鐘や大砲も交えて華々しく描写される。

このようにナポレオンに攻め入れられた国や地域では、彼に対する批判に貫かれた作品が数多く書かれている。例えばロシアつながりで言えば、レフ・トルストイ（1828〜1910）の長編小説を基にセルゲイ・プロコフィエフ（1891〜1953）が10年以上の歳月をかけて1952年に最終稿を完成させたオペラ〈戦争と平和〉。これは、アドルフ・ヒトラー（1889〜1945）率いるドイツ軍の侵略を彼の地が受けていた時代、彼らをナポレオン率いるフランス軍になぞらえて書かれたものである。

あるいは、ヒトラーの反ユダヤ人政策によってドイツ語圏を追われ、アメリカへ亡命したアルノルト・シェーンベルク（1874〜1951）の場合。彼は1942年、ジョージ・バイロン（1788〜1824）のテキストに曲を付けた〈ナポレオンへの頌歌（しょうか）〉を完成させ、革命理念を引っさげて登場した「英雄」が独裁者へ変貌する様を、生々しく描き出した。

反ナポレオンという立場は同じながら、もう少し複雑なのが、ハンガリーのゾルタン・コダーイ（1882〜1967）が作曲した歌芝居、通称〈ハーリ・ヤーノシュ〉（1926年初演）だ。ストーリー自体は、「ナポレオンを相手にした戦争に参加して、彼を捕虜にした」とか、「オーストリア皇帝の娘（彼女は強引にナポレオンの妃にさせられる）から求婚されたが断った」とかいった、ハーリ・ヤーノシュなる男の荒唐無稽な法螺話（ほらばなし）から成っている。重要なのは、ハンガリーは長年オーストリアの支配下に置かれており、そのためナポレオンとの戦争にも駆り出されはしたものの、その裏側ではフランスに対してもオーストリアに対しても密かな反感が渦巻いていたという点だろう。まただからこそ、「オーストリア皇帝の娘から求婚云々」という法螺が吹かれたのであって、事実ハンガリーでは19世紀が進めば進むほど、オーストリアからの独立を求める民族運動が激化した。

解放者に捧げられた曲

実のところ、オーストリアの支配下に置かれていた地域では、当のオーストリアを執拗（しつよう）なまでに攻撃したナポレオンに対し、「解放者」の姿を見る人々もいた。

例えば、伝統的にオーストリア支配の影響が強かったイタリア中部はルッカである。ナポレオンが覇権を握っていた19世紀初頭にはこの地に「ルッカ共和国」が誕生し、それを引き継ぐ形で妹であるエリザ・ボナパルト（1777〜1820）を大公妃に迎えた「ルッカ大公国」が成立した。そして当時この国の宮廷楽団のコンサートマスターとして活躍していたニコロ・パガニーニ（1782〜1840）は、1807年ナポレオンの命名祝日に際して、独奏ヴァイオリンと管弦楽のための〈ナポレオン・ソナタ〉まで作曲したのだった。

また、ルッカに生まれ、19世紀末から20世紀前半のイタリア・オペラ界のスター作曲家となったジャコモ・プッチーニ（1858〜1924）の場合。彼の代表作〈トスカ〉（1900年初演）では、オーストリアの支配下にあえぐローマにナポレオンが迫る中、革命の闘士が「ナポレオン万歳！」と叫ぶ場面がある。

……そんな「英雄」が、彼自身の行為によって「裏切り者」にも「独裁者」にもなってしまう状況。このように考えてみると、英雄を求める時代とは、きわめつきの熱狂に彩られた、きわめつきに不安定な時代なのだろう。

（こみや まさやす・
ヨーロッパ文化史研究家、横浜国立大学教授）

◎コンサートマスター

ダニエル・ゲーデ

Daniel Gaede

オーケストラと聴衆とのコミュニケーションを感じます

≪契約満了のため、ゲーデさんがコンサートマスターとして演奏会に出演するのは３月の演奏会まで。この３年間の読響サウンドはいかがでしたか≫

私は読響の響きが大好きで、恋をしていると言ってもいい。プロフェッショナルな技術と、感情のこもった演奏をするオーケストラだと思います。3月も大変素晴らしいプログラムですね。ローター・ツァグロゼクさんとは初の共演で、私自身楽しみです。

読響との初めての演奏会は良く覚えています。カンブルランさんの指揮でマーラーの交響曲第6番でした。その指揮ぶりとともにオーケストラの高い水準、温かな音色に感銘を受けました。下野竜也さんの演奏会は、現代作品を組み合わせたプログラムが多く、個性的で印象に残っています。

素晴らしい指揮者を迎えたことが、良い影響を与えていると思う。強い影響力を持っている指揮者と仕事をしていけば、読響はさらに発展していくと確信しています。

≪３大交響曲や〈第九〉連続公演など、ドイツにはないプログラムの演奏会にも随分出演しました≫

繰り返し演奏されている作品であるにもかかわらず、毎回客席から熱狂ぶりが伝わってきました。作品の持つ力ですね。繰り返し演奏するとつまらなくなるリスクもありますが、オーケストラ、観客の熱は薄れることなく、毎回素晴らしい演奏につながりました。

≪ゲーデさんはウィーン・フィルのコンサートマスター（1994～2000年）を務め、昨年にはベルリン・バロック・ゾリステンの芸術監督に就任した。欧州と日本のオーケストラ、どんなところが違いますか≫

日本に来て好ましいと思ったのは、最初のリハーサル時からオーケストラの準備が整っていることです。欧州のオーケストラは、そこそこの状態でリハーサルを始めるんですよ。

オーケストラより聴衆の方に違いがあります。クラシックファンの高齢化が指摘されていますが、日本の聴衆の方が欧州よりも若い！　日本の聴衆は熱心に、注意深く耳を傾けて下さるので、聴衆と演奏者の間にコミュニケーションが生まれる。それを感じます。

≪若者にクラシックを広げるには≫

小さい子供の頃からクラシック音楽に触れる機会をたくさん作ることが必要不可欠です。様々な選択肢の中にクラシックがあるという環境を作りたい。それは、親にばかり頼れない。もっと国が政策としてそうした状況を作る必要があると思います。

≪ゲーデさん自身、６歳でヴァイオリンを始めた。兄がヴィオラ、弟はチェロの演奏家という音楽一家だ≫

両親とも音楽家ではありません。母はピアノを学びたいと思っていたけど、戦争のせいでそれができなかったので、願いを子供に託したのでしょう。私が音楽家になろうと決めたのは17歳の時です。ちょうどその頃、パールマンが演奏するサン＝サーンスの〈ロンド・カプリチオーソ〉をレコードで聴きましたが、ものすごくインパクトがあって影響を受けました。

≪ゲーデさんは、読響以外にも室内楽など日本で様々な音楽活動をしていますね≫

夏の「霧島国際音楽祭」と「若い芽の弦楽アンサンブル in 軽井沢」には定期的に参加しています。霧島のマスタークラスの受講生は、大学生主体ですが、私のクラスの受講生にはドイツに留学して私のレッスンを受けている人もいます。つながっているのがうれしいですね。

軽井沢では、小学4年生から大学生までが受講しています。読響の渡部玄一さん、鈴木康浩さんたちと指導に当たっていますが、子供たちの演奏レベルの高さ、意欲には感動します。彼らを見ていると、日本のクラシック音楽の未来には希望が持てると思います。

≪この３年間で、読響とゲーデさんとはとてもいい関係になりました。今後はゲストコンサートマスターあるいはソリストとしてご出演願います≫

私も読響の皆さんが大好きです。是非またご一緒する機会があればと願っています。

絶美のハーモニー！ フィンジの知られざる傑作を披露

4/14（木）19:00　第557回 定期演奏会 サントリーホール

下野竜也

池辺晋一郎：多年生のプレリュード
ベートーヴェン：交響曲 第2番
フィンジ：霊魂不滅の啓示
指揮：**下野竜也**　テノール：**ロビン・トリッチュラー**
合唱：**二期会合唱団**（合唱指揮：**冨平恭平**）

下野が振る名曲選〈ヴォツェック〉&〈ジュピター〉

4/19（火）19:00　第591回 サントリーホール名曲シリーズ サントリーホール

エヴェリーナ・ドブラチェヴァ

ベルク（フォン・ボリース編）：パッサカリア
ベルク：歌劇〈ヴォツェック〉から3つの断章
モーツァルト：交響曲 第41番〈ジュピター〉
指揮：**下野竜也**　ソプラノ：**エヴェリーナ・ドブラチェヴァ**

世界へ羽ばたくヤマカズのチャイコフスキー〈悲愴〉

4/23（土）14:00　第186回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール

4/24（日）14:00　第186回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール

山田和樹

オネゲル：パシフィック231
グリーグ：ピアノ協奏曲
チャイコフスキー：交響曲 第6番〈悲愴〉
指揮：**山田和樹**　ピアノ：**小山実稚恵**

ウィーン・フィルに衝撃デビューしたシャニの〈巨人〉

4/29（金・祝）14:00　第87回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール

4/30（土）15:00　第1回 パルテノン名曲シリーズ パルテノン多摩大ホール

ラハフ・シャニ

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲
マーラー：交響曲 第1番〈巨人〉
指揮：**ラハフ・シャニ**　ヴァイオリン：**佐藤俊介**

4月 公演の聴きどころ

14日の《定期演奏会》で2016年度シーズンが幕を開ける。まず首席客演指揮者の**下野竜也**が、20世紀イギリスの作曲家フィンジの名作〈霊魂不滅の啓示〉に挑む。イギリスの詩人ワーズワースの詩に作曲された本作は、テノール、合唱と管弦楽が織りなす美しいハーモニーが魅力。アイルランドの若手テノールの**ロビン・トリッチュラー**、**二期会合唱団**と共に、心やすらぐフィンジの音世界をお届けする。また、2011年に第500回定期を記念して池辺晋一郎氏に委嘱し、下野が初演した〈多年生のプレリュード〉も再演する。

19日は引き続き下野が、ウィーンで学んだ経歴にちなんで、モーツァルト〈ジュピター〉にベルク作品と、新旧ウィーン楽派の粋を集めたプログラムで、手腕を発揮する。往年の名ソプラノ、ヴァラディの薫陶を受けた新星**エヴェリーナ・ドブラチェヴァ**の歌声にも注目したい。

《マチネーシリーズ》は2016年度から、同じ週末の土曜日と日曜日の午後に同一プログラムを演奏する形へ変わる。新シーズンの初回にふさわしく23日と24日は、近年ますます躍進を続ける“世界のヤマカズ”こと**山田和樹**が、チャイコフスキーの傑作〈悲愴〉を指揮。気鋭のタクトが、明暗のコントラスト鮮やかなチャイコフスキーの音楽をどのように響かせるか、期待が高まる。前半では、日本屈指の実力派・**小山実稚恵**がグリーグのピアノ協奏曲で、華麗な独奏を披露する。

29日の《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》と30日の《パルテノン名曲シリーズ》には、昨年ウィーン・フィルの定期演奏会に鮮烈デビューを果たした**ラハフ・シャニ**が初登場。シャニは2013年にマーラー国際指揮コンクールで優勝、次々と欧米の一流楽団の指揮台に立ち、旋風を巻き起こしている。巨匠バレンボイムも絶賛する26歳の新鋭が、今回も縁あるマーラーの交響曲第1番〈巨人〉を指揮し、青春のエネルギーを爆発させるだろう。メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲では、欧州を拠点に活躍の場を広げる**佐藤俊介**が、曲にふさわしい様式感を持つ冴えたソロを繰り広げる。

（文責：事務局）

トスカニーニ国際コンクール準優勝の三ツ橋が振る〈ボレロ〉

5/15（日）14:00　第88回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

©Walter Garosi
三ツ橋 敬子

レスピーギ：バレエ音楽〈風変わりな店〉から
レスピーギ：交響詩〈ローマの噴水〉
ニーノ・ロータ：コントラバスと管弦楽のための協奏的ディヴェルティメント
ラヴェル：ボレロ
指揮：三ツ橋敬子
コントラバス：石川 滋（読響ソロ・コントラバス）

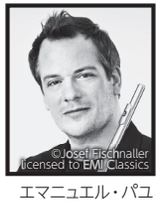
©読響
石川 滋

欧州で活躍する俊英カラビッツが得意のプロコフィエフを指揮

5/24（火）19:00　第558回 定期演奏会
サントリーホール

©Sasha Gusov
キリル・カラビッツ

プロコフィエフ：交響的絵画〈夢〉
ハチャトゥリアン：フルート協奏曲
プロコフィエフ：交響曲 第5番
指揮：キリル・カラビッツ
フルート：エマニュエル・パユ


©Josef Fischnaller
licensed to EMI Classics
エマニュエル・パユ

〈ロミオとジュリエット〉&“世界の女王”ムローヴァが共演！

5/28（土）14:00　第187回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

5/29（日）14:00　第187回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

5/31（火）19:00　第592回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

©Sussie Ahlburg
キリル・カラビッツ

ベルリオーズ：序曲〈ローマの謝肉祭〉
シベリウス：ヴァイオリン協奏曲
プロコフィエフ：バレエ音楽〈ロミオとジュリエット〉から
指揮：キリル・カラビッツ
ヴァイオリン：ヴィクトリア・ムローヴァ

©Henry Fair
ヴィクトリア・
ムローヴァ

お申し込み・お問い合わせ
読響チケットセンター 0570-00-4390（ヨミキョー）
（10:00〜18:00／年中無休）
ホームページ・アドレス http://yomikyo.or.jp/

マルチな活動で注目を浴びる鈴木優人が待望の初登場！

6/7（火）19:30　第10回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

©Marco Borggreve
鈴木優人

《鈴木優人指揮の小編成オーケストラ》
武満徹：地平線のドーリア　C. P. E. バッハ：チェンバロ協奏曲
メンデルスゾーン：交響曲 第1番
指揮・チェンバロ：鈴木優人

ウィーン響などで絶賛された名匠エルツの〈展覧会の絵〉

6/11（土）14:00　第89回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

6/12（日）15:00　第2回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

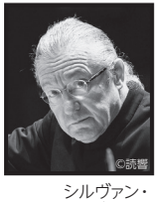
©Marco Borggreve
オラリー・エルツ

グリンカ：歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲　ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第2番
ムソルグスキー（ラヴェル編）：組曲〈展覧会の絵〉
指揮：オラリー・エルツ　ピアノ：**アンナ・フェドロヴァ**

カンブルランが振る二つの名曲〈皇帝〉&〈火の鳥〉

6/18（土）14:00　第188回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

6/19（日）14:00　第188回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール


©読響
シルヴァン・
カンブルラン

ストラヴィンスキー：管弦楽のための4つの練習曲
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第5番〈皇帝〉、バレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉から
ストラヴィンスキー：バレエ組曲〈火の鳥〉（1919年版）
指揮：シルヴァン・カンブルラン　ピアノ：**ハヴィエル・ペリアネス**

高評カンブルランのブルックナー&ケラスが共演！

6/24（金）19:00　第559回 定期演奏会
サントリーホール

©Marco Borggreve
ジャン＝ギアン・ケラス

ベルリオーズ：序曲〈宗教裁判官〉
デュティユー：チェロ協奏曲〈遥かなる遠い世界〉
ブルックナー：交響曲 第3番〈ワーグナー〉
指揮：シルヴァン・カンブルラン　チェロ：**ジャン＝ギアン・ケラス**

迫力のクライマックス！ 華麗なるマーラーの大管弦楽

6/29（水）19:00　第593回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

6/30（木）19:00　第14回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール（大阪）

©Marco Borggreve
小菅 優

リスト：ピアノ協奏曲 第2番　マーラー：交響曲 第5番
指揮：シルヴァン・カンブルラン　ピアノ：**小菅 優**

2016都民芸術フェスティバル

■3/20（日）14:00　東京芸術劇場コンサートホール
指揮：下野竜也　ピアノ：小山実稚恵

ベートーヴェン／付随音楽〈アテネの廃墟〉序曲
ピアノ協奏曲 第4番
交響曲 第5番〈運命〉

［料金］A ¥3,800　B ¥2,800　C ¥1,800
［お問い合わせ］日本演奏連盟事務局　03-3539-5131

読響×コバケン　ヨーロッパ音楽紀行

■3/27（日）15:00　所沢市民文化センターミューズ
指揮：小林研一郎

ブラームス／ハンガリー舞曲第5番
スメタナ／交響詩〈モルダウ〉
リムスキー＝コルサコフ／交響組曲〈シェエラザード〉ほか

［料金］S ¥5,000　A ¥4,000　B ¥3,500　P ¥3,000
［お問い合わせ］ミューズチケットカウンター　04-2998-7777

芸劇&読響　0才から聴こう!!　春休みコンサート

■3/30（水）11:30/13:30　東京芸術劇場コンサートホール
指揮：梅田俊明　ヴァイオリン：二瓶真悠　ナビゲーター：中井美穂

ビゼー／〈カルメン〉前奏曲
サラサーテ／ツィゴイネルワイゼン
ヴィヴァルディ／〈四季〉より“春”第1楽章
ベルリオーズ／ラコッツィ行進曲 ほか

［料金］S ¥3,500　A ¥2,500　こども（3才以上小学生まで）¥1,000
［お問い合わせ］東京芸術劇場ボックスオフィス　0570-010-296

ミュージカル・ミーツ・シンフォニー 2015

■4/2（土）17:00、4/3（日）12:00　Bunkamura オーチャードホール
指揮：円光寺雅彦
出演者：濱田めぐみ、沼尾みゆき、山崎育三郎、ピーター・ジョーバック、石丸幹二　構成・演出：寺崎秀臣

〈オペラ座の怪人〉〈レ・ミゼラブル〉〈ミス・サイゴン〉〈サンセット大通り〉
〈モーツァルト！〉〈ウィキッド〉ほか（抜粋）

［お問い合わせ］読売新聞東京本社文化事業部　03-3216-8500（平日10:00～17:00）